



さらしなな



第11号

「友の会」だより

2004・秋

冠着四態



千曲市稲荷山の治田公園から



麻績村のガッター地籍近辺から

姨捨山の伝説を耳にしたのは幼少のころ、母から何回となく聞いた。その山が冠着山であるとして明治の中ごろ、冠着山の復権運動を始めた人がいた。初代更級村村長の塚田雅丈である。雅丈は眺望の良い村外の3箇所(大池を除く)に土地の有志と共に遥拝所を設け、冠着山を大切にした。(塚田雅丈の肖像＝塚田せつ子さん提供、刈屋原の遥拝碑＝高野六雄さん提供、その他の写真と文＝関清春さん、史跡案内＝塚田哲男さん)



大池から



坂城町・刈屋原から 右に冠着山

来年も続くことを願って 縄文丸よ、ありがとう

第八回千曲川いかだ下りコンテストが八月二十二日に開かれ、今年もまた楽しく参加させていただきました。

早朝に集合して、スタート地点の坂城へ。

地元ケーブルテレビの取材を受けた後、縄文丸のトレードマーク？楽しみ？恐怖？の顔メイクをして待つこと

しばし。成果の顔を見てみんな笑っている。自分の顔がどうなっているのかわからないのが幸いかも。

いかだに乗りたいのは、普段では見られない川の上からの眺めのすばらしさ、おもしろさ、また、その上に新しい発見があるからだ。ずぶぬれになりながらもゴールを目指し、一生懸命にカイを漕ぐ姿はこれもまた見ごたえがある。

大会委員長の挨拶も終り、いよいよ開始である。十時二十三分、スタートの時がきた。サポーターに見送られ、元気にスタートが出来ました。思っていた以上に風もなく、うまく流れに乗ることができ、いたってスムーズに進みました。

毎年のことですが、鮎釣りの人たちには大変申し訳なく思いつつ、こちらは思う存分楽しませてもらっています。いくつもの橋の上からは、家族、知人等大勢の



分楽し

たちの力強い応援があり、こちらもカイを持つ手に力が入ります。ペースが上がり、予定より早く着いてしまいです。

結果は一時間四十五分で十八位でした。

今年で最後になるとのことですが、みんなが力を合わせていかだを作り、力いっぱいカイを漕ぎゴールを目指す、こんなにすばらしいいかだ下りを終りにしないで、来年も続くことを願います。さらしなの里歴史資料館の皆さん、そして友の会の皆さん、本当にご苦勞様でした。そして、縄文丸よ、ありがとう。

（北村忠行）



本年四月から、お世話になっております。

月の名所・姨捨伝説に伝わる冠着山の裾野に広がるさらしなの里に、はるか四千五百年前の縄文の村が蘇り、ここを訪れる多くの皆さんが、古代のロマンに浸り、体験をして古代文化に想いを馳せています。

さらしなの里友の会会員の皆様には、古代を継承する「縄文まつり」を中心的に担っていただいております。資料館事業にご理解・ご協力をたまわり、深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくご指導いただきますようお願いいたします。

（さらしなの里歴史資料館館長・小松勝）

冠着伝説をオペレッタに

本年度の音楽会は、百三十周年記念ということで全校でオペレッタに挑戦することになりました。学校で行われるオペレッタは、子どもが主役になれるテーマを扱った音楽劇で、本校では更級の地にゆかりがあり、校歌にも歌われている冠着山を題材とする「全校オペレッタ『冠着山の伝説』」を音楽係が中心となって創作しました。

内容は日本の神話「天岩戸伝説」をもとにしました。力持ちの神様タヂカラオは、アマテラスが隠れていた岩戸をよそへ運ぶ途中、美しい眺めの地に通りがかり、ふと足を止めた。そこが更級の里。「更級の里に生まれた私たちは、自然の美しい地に生まれたことを誇りに思い、後世に美しい眺めを残していきたい」という気持ちをオペレッタで表しました。

歌、踊り、演技の他に、いくつかの楽器で

効果音を入れたり、また、原始の躍動的なリズムを表現するために西アフリカの太鼓「ジャンベ」をさら／＼の里歴史資料館よりお借りして加えたりしました。そのほか演出として、六年生による大道具、小道具、衣装の製作。ステージの横に縦横五段の大きなスクリーン



を掲げ、冠着山の映像を写したり、照明の技術者の方をお願いして、スポットライトを操作していただいたりしました。

更級小130周年、全校一つになって

六年生の歌による録音でデモテープを作り、各学級で歌や踊りを練習をし、その後、音楽集会で歌の練習、全校練習を三回重ねて本番に臨みました。

いよいよ音楽会当日の六月三十日。この日は大変暑い日でした。プログラムは、いつもの音楽会のように全校の歌、各学級学年の演奏と進んでいき、最後に「冠着山の伝説」を行いました。子ども達も先生方も、多少の不安を抱え、ステージ側に整列しました。会場は暗幕で暗くなり、大きな映像が映し出され、会場は何かが始まるぞという雰囲気になりました。

六年生の演技に圧倒される下級生がいたり、話が進んでくると、だんだん歌の中に引き込まれ、気持ちを込めて歌う子ども達の姿がありました。十五分の長いステージでしたが、子ども達はスポットライトを浴びて、精いっぱい歌って踊り、体育館いっぱいに子ども達の声が響き渡りました。

全校が一つになって取り組んだオペレッタを通し、更級小学校に大きな宝物を残したように思います。(更級小・櫻井真由美)

おらほの冠着 ⑪

平成三年（一九九一）、戸倉町誌第一巻が刊行された。その植物編の執筆者は、当時信大教授だった清水建美先生である。この先生、まさに「歩く植物図鑑」とも申すべきで、冠着山植物探査

に度々参られ、時には道案内もしたのだが、目にとまる草・木の名前、特色など即座に説明され、一点のよどみがない。

町誌の記述の

中で先生は、冠着山中の日本海側の植物として、「イヌガヤ」「チャボガヤ」が全山にあることが特筆されるとし、そのほかに「ユキグニミツバツジ」など八種類の植物をあげている。他方、太平洋側要素として「ヒカゲツツジ」「イカリソウ」等の四種を紹介された。冠着山は



西の日本海側と、東の太平洋側との植物の接点であり、植物の種類も多く（五九八種ある）、温帯から亜寒帯までの草地にみられるものがあり、特に散在する「マルバサンキライ」は全国的に稀なものとされている。

山といえば生えているのは杉、檜、唐松や松と、焚き物の山とばかり思っていたのだが、およそ六百種もの植物がひしめき合っているとは驚くばかりだ。たまに知った名の草木もあったが、それこそ本当に九牛の一毛だった。

岩の山とみられた冠着山の多様な姿が現れた。東と西の植物の接点、あるいは分岐点という、特異な地に位置するのである。

昭和三十九年、昭和天皇は八子ヶ峰（蓼科）の植樹祭のあと、白鳥園に泊まれ、次の日、大池高原に植物採集したのも理由がわかる。大池高原も冠着と同じく多様な植物が育っていたのだ。（塚田哲男）

〔編集後記〕友の会だより編集委員会では、冠着山の姿を四方から紹介する場合、どのポイントからがいいかを検討し、更級村初代村長の塚田雅丈氏に登場してもらうことにしました。遥拝碑はいずれも今から約百年前に建てられました。残念なのは刈屋原の碑面は大半が剥落し、由緒が分からなくなっていることです。千曲市磯部の郷土史研究家、高野六雄さんをお持ちの貴重な写真をお借りしました。

いかだ下りのエッセーをお書きいただいた北村忠行さんは、初回からずっと乗船してきた方です。今回も河原の見物人と気さくに冗談を交わす名船頭でした。

更級小は百三十周年記念式典を十一月二十日に行います。この節目にさらしなの里の自然や人、文化財、伝統を集め「更級の里マップ」を作るそうです。ユキグニミツバツジの写真は戸倉町誌自然編から転載しました。

さらしなの里友の会事務局

〒389-0812

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話 026(276)7511

FAX 026(261)4161